

対 談

【司会】 司会を務めさせていただきます浅井です。私は経済史を研究していますが、専門は日本の近現代史で、古代史は全く知りません。あまり適任ではないことを自覚しておりますけれども、私がお二人にご講演をお願いしたという経緯で司会役を仰せつかることになりました。交通整理だけですけれども、役割を果たさせていただきたいと思います。

大月先生は経済史、特に古代・中世のビザンツ、東ローマ帝国の経済史がご専門で、『帝国と慈善—ビザンツ』という御著書を書いておられます。いままで東ヨーロッパとかギリシャは遅れた非常に古くさいところ、あるいは封建的というイメージでしたが、それを一新させて、古代・中世のビザンツが世界で最も進んだ福祉大国であったという説を出され、みんなをあっと言わせたわけです。

明石先生は経済理論がご専門で、1988年に『マクロ経済学の系譜』という本を出されています。もう経済学のほうは、やり尽くしたということで、最近では歴史の研究に取り組まれています。ちょうどヒックスが、晩年に歴史に関心を移して、『経済史の理論』を書いたのと同じような感じですか。いわば、「日本のヒックス」とも言えましょう。

二人の大家の対談ということになりますが、時間の関係でわたしの方から3つほどの論点を出して、お尋ねするという形で進めたいと思います。そのうえで、お二人でさらに質疑、反論等がありまし

たら、話していただこうかと思っております。

どこから始めればよいのか迷いますが、お二人の話の前提に、ポランニーの学説があると思います。最近ポランニー・ルネサンスで、海外でも日本でもブームがおきています。ご承知のように、ポランニーは経済人類学の開拓者であり、前近代の社会を見る新たな視角を提示しました。その内容は、大月先生が紹介されたとおりです。

まず、70年も前に書かれたポランニーの著作をどう評価するのかというあたりから話をさせていただければと思います。大月先生とは対照的に、明石先生は、むしろポランニーに対して距離をとっていらして、ヒックスの慣習経済とか指令経済という言葉を使っておられます。よろしくお願いいたします。

【明石】 わたしのほうからということで。ポランニーは、わたしにとっても非常に魅力のある、刺激を受けた学者でして、いわゆる互酬とか再分配、交換という、社会的な統合形式があって、その位置づけは時代によって異なると提示した人であると思っています。それは言い換えると、近代から見れば市場社会が圧倒的なのですが、時代をさかのぼれば、むしろ領域としては非常に小さいといえますか、後から出てきたもので、他の領域のほうで支配的である。市場経済というのはそういう意味では絶対的なものではないと

いうのですね。そういう視点を示してくれたということで、非常に魅力的であったかと思うのです。

ただ、ちょっとポランニーの業績についてずれを感じてますのは、彼が早くして60年代で亡くなってしまいますから、その後のメソポタミアに関する知見というのは随分と変わってきて、商人の活動というのは非常によくわかってきています。そうするとポランニー自身はどちらかというところ再分配の発想法で交易をとらえていましたから、その枠の中で商人は活動していたのだと言っていたのですが、むしろかなり利益を追求しながら活動していたという部分もわかってきているので、ポランニーの社会的統合形式の位置づけ、つまり相対化するという考え方は非常に魅力的なのですが、マーケットといえますか、広い意味での交換の領域というのは、かなり昔からそれなりの位置を占めていたのではないかと考えるようになっており、ちょっとそのへんでずれがあるのかなと思っています。

【大月】 いま、明石先生がおっしゃったとおりで、人間の経済を支える3つの原理ということを行ったということが、ポランニーの一大成果だと認識しています。恐らくポランニーの生きた時代状況というのをもう一度見つけ直して、彼に限らず同時代のマージナルマンたちが、どういう心持ちでヨーロッパの同時代、20世紀なりを見ていたか。ないしは19世紀以来の市場経済や市民社会なりを見ていたかということを見つめ直すべきだと思います。それが、浅井先生が最初におっしゃったポランニー・ルネサンスの機

運なのだと思うのです。21世紀だからこそ見つけ直すことができるということだと思います。

ポランニーの所説については、古代世界にあっても市場が活発にあって、利潤の追求もしていたという知見が提示されているというのは、いまご紹介があったとおりで、そのとおりだと思います。恐らくその市場経済を担っている「市民」ですけれども、ブルジョワジーが、そのパワーを肥大化した19世紀の末から20世紀のヨーロッパ、これをある種デフォルメして、それを相対化するために言ったのだらうと思います。

私の話の中でも、200年のヨーロッパ近代ということを申しました。ですから(アダム・スミスが『国富論』を出版した)1776年以降であっていいわけですが、その200年の市民社会というものが紡ぎだした歴史というものを全体として見渡して、恐らくポランニーはそこで少し違和感を持ちながら生きていた人なのだと思うのです。ですから、ヨーロッパから逃げ出すということもしたわけです。

そういう中で、彼がやったことは、200年の歴史の行く末を見るというわけでは全然なくて、オールタナティブないろいろなことも考えるべきだということを言った人だ、とわたしは考えています。その限りでは、前近代社会でももちろん一貫して市場交換はございます。いったんなくなったとされる9~11世紀は、きょう明石先生のお話の中で出てきた、アルプスの北の「少し停滞」したという時代です。当時はエジプトのファティマ朝を中心に、確かに銀交易が盛んで、圧倒

的に経済状態は地中海の東のアラブ世界のほうが上位にあります。経済活動も活発でした。蓄財の程度も高いというのがわれわれの共通認識です。経済史をやっている人間は、それをいかに計量的に把握するかということに汲汲とするわけです。ともあれ十字軍の経験を経て、彼らが東の物産・物品に触れ、カール・シュミットがいうところの「空間革命」を経験します。地元の当たり前の商品を遠隔地で交易することによって特産化できることに気付き、大市が立つようになって遠隔地交易がはじまって商人階層が生まれたというのが、今日の先生のお話にあった、ヨーロッパ中世の商業復活劇なのです。

他方で、今日ご紹介したアンリ・ピレンヌは、1862年から1935年に生きたベルギー人ですが、彼もやはり同じように、ドイツ・ナショナリズムにある種の違和感をもった人物でした。ドイツとかフランスとかベルギーと言っている場合ではないよと。第一次世界大戦のあとの大戦間期にそういうことを言った人です。ヨーロッパが一体だった頃を思い出せ、ということで、本来の「ヨーロッパ史」を提唱しました。そのあたりが、またEUにつながる人々の心を支えたとも言われております。

申し上げたいことは、ピレンヌが言ったことですが、9世紀に地中海交易圏から西ヨーロッパは脱落した、ということです。これはピレンヌ・テーゼと呼ばれます。ピレンヌ・テーゼといいますが、マホメットが現れてビザンツが東に国力をそがれたから、イタリアやその北西の地域へのケアができなくなった。

そのことにより、西ヨーロッパが自立的にどうにかしなければいけなくなって、自立した、という歴史現実を指し示しています。彼が言うには、経済的に地中海交易圏から脱落して、しかたなく自給経済、自給自足の農村経済に脱落したのだというわけです。およそ9世紀に、北西ヨーロッパが自給自足の農村経済に脱落したというのがピレンヌ・テーゼです。

ピレンヌはもう1つ言っていて(第2テーゼ)、十字軍を経て地中海世界を知った西ヨーロッパの人間が遠隔地交易を復活させて、商業活動を活発化した。これが「中世都市」を成立させて、ここに「市民」が誕生したというわけです。

この2つのピレンヌ・テーゼを踏まえてみますと、彼はボランニーと同じようなことを別の素材で言った人、と申し上げることができるかと思います。もちろんボランニーのほうが後の世代に属していますので、ピレンヌの申したこと、いま申し上げたような西ヨーロッパ史に関する大きな見取り図、つまり9世紀までのヨーロッパは地中海世界と一体のもとにあった、また9~12世紀の西ヨーロッパは農村社会に「転落」したが一体のもとにあった、ドイツだ、フランスだ、イタリアだなどと言うべきではない、そして市場経済、つまりそれを担う市民層は、12世紀の商業復活とともに誕生した、という見取り図が、20世紀の社会科学に大きな影響を与えた、といつてよいかと思います。

それまでも都市はあったじゃないかとお思いになるかもしれませんが、そこが1つの大問題でして、9世紀~12世紀に市場はあったかという大きな問題に取り組

むべきなのですが、ローカルにはあったのです。しかし、パーセンテージとしては少なかった。ですから、明石先生のお話の中にもあったように、ヨーロッパは「停滞」しているのです。

それを停滞と言っているのかどうかは、評価の仕方の問題ですけれども、9~12世紀の北西ヨーロッパ地域にも、市場はローカルなものとして常にありました。その市場なるものは何なんだということになります。単に物々交換の場なのではないのか。貨幣を媒介とした交換の程度は。徴税はありえたのか。実際のところ、はたして再分配の機構があったのかということ、西ヨーロッパの中世社会論を論ずるときには問題になります。

ビザンツは基本的に再分配国家です。富をコンフィスケイトしてばらまいています。それが個人のチャネルもあれば、神への寄進というチャネルでもばらまかれているということ、今日は申し上げました。西ヨーロッパでは、それがあったかどうかは問題です。

ポランニーの話に戻りますけれども、ポランニーはここ200年間の市民、商業・工業に従事する都市民、非農業セクターの住民が、権力を掌握して経済ナショナリズムを振りかざしてやってきた、その渦中であって、違和感を持って、それだけが経済のあり方ではない、ということを行いました。極めてアクチュアルな、ある種政治的プロパガンダを含むような発言だったのかな、とわたしは感じております。

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、時間の都合もありますので

次のテーマに移らせていただきます。いま、ちょうど大月先生のほうから出ている国民国家という問題を取り上げたいと思います。国民国家をどう乗り越えるかが、最近はやりのテーマになっています。西川長夫さんの『国境の越え方』という本がだいぶ前に出て、それ以来国民国家論が盛んになりました。わずか200年前にできた、国民国家という狭い枠組になぜとられなければいけないかが歴史の分野でさかんに議論されております。

国民国家を相対化する場合に、注目を集めているのが帝国です。いわゆる帝国主義の帝国ではなくて、古代・中世・近世の帝国です。帝国は国民国家よりも寛容で、包容力のある国家だったというように、帝国が見直されています。大月先生の御著書もそういう文脈で書かれていると私は感じております。

そこで、帝国に焦点を当てたいと思います。きょうのテーマはヨーロッパ、地中海世界を中心とする帝国であり、その基盤には、先ほど出てきた都市国家がありました。

帝国というのは中国にも、インドにもあったわけです。そういう帝国をどう考えるのか。最近の学界のもう1つのはやはり、中国がかつては非常に経済的に進んでいたという議論です。そういうことも含めて、帝国について、ちょっとお二人のお考えを伺いたしたいと思います。

【明石】 国民国家との関わりで帝国という、そういう発想がわたし自身あまりないものですから、直接お答えはできないかとは思いますが。

ただ、ただいま出てきました都市国家

から帝国、もしくは地中海世界、ローマ帝国との関わりというような文脈で考えますと、あとは中国の中華帝国との関わりもあるかと思うのですが、実は前にローマ帝国と漢帝国の間の比較をちょっと論じたことがありまして、経済学的な意味合いでですね。両者にとっても共通な点があって、都市国家から領域国家、そして帝国というプロセスは、どちらも踏まえているわけです。帝国が成立するときに、どういうふう以前からあった多くの都市国家を統合するかという問題がやっぱりあって、ローマ帝国の場合は東地中海の特にギリシャの都市国家ならびにヘレニズム国家というのが先進国家なわけです。地中海西側の世界はそういう意味では後進国であって、イタリアはそういう意味での中間にある、どちらかという新興国になる。

それが帝国として全体を統合していくという場合に、いかに前の都市国家といったものをうまく統治して、引き込んでいくかというようなことを工夫していかなければならなくなる。都市国家が実はベースにあって、その後の征服過程のプロセスを経て、そのうえでそれに合った制度をつくり上げていく。有り体に言うと都市国家、あとはイタリアも都市国家の集まりなのですが、そのうえで共和制時代に征服した領域、これが元老院属州になって、その後、外側の皇帝が管轄する皇帝属州というのができていく。統治形態が実はそれぞれに対応して違っていたのです。やはり先進的な地域はそれなりの、昔からの都市国家の内容を尊重する。逆に国境領域のそういった属州に対しては、軍事的に皇帝が上に立って統治

するというような形になっていたかと思っています。

これと同じような事情が、実は中国でもみられるのです。中国の秦漢帝国。どちらも、例えば秦は後進地域の辺境のほうから生まれた王国なわけです。それが中国を統一し、統治する。そうすると、先進地帯というのは黄河の中流地域で、そこが実はやっぱり都市国家の集合体なのです。いろんな意味での先進地域ですから、統治する際に都市国家のいままでの制度をかなり温存する、もしくは優遇するわけです。

それに対して辺境の地域は、郡と呼ばれているような行政地域を構成して、ある意味では軍事的な組織を優先させた形で統治していく。そういうような事情がありましたから、意外に2つの帝国の間には共通点があったわけですね。ということで、帝国といっても決して最初から一様に成り立ったものではなくて、それが同一の行政組織に成り立つためには、例えば2~300年くらい必要になってくるのです。中国とローマで同じような経緯を辿って、官僚組織が成立していくという意味合いで、帝国というものをそういう部分も考えてシンクロ性のあるものなのかなと思っています。

【大月】 いま、ユーラシアの西と東の帝国のシンクロ性について明石先生がおっしゃって、そのとおりなのですよ。われわれの日本列島とか、アルプスの北のいわゆるヨーロッパは、帝国の周辺に成り立った未開民族の歴史なのです。これが国家形成に入ったときに、文明としての帝国のいろんな文物を取り入れていっ

たという歴史がございまして、なので西ヨーロッパの歩みと日本の歴史の歩みというのは、社会経済史的には極めて同質的なのです。なので、あちらで鍛え上げられた、いうところの発展段階説的シェーマというのがあるのですが、それが日本史に当てはめられまして、マルクス主義の先達を中心に大いに語られたというのが、大体30年前までの社会経済史学界の実情じゃなかったかなと思うのです。

話は日本やヨーロッパの学界の話ではなくて、「帝国」とは何かという話なのですが、明石先生がおっしゃったように寛容なスタンスで都市国家を服属させていったある都市国家の歴史が、帝国の歴史になるのです。わたしはローマのほうしか見ておりませんので、その認識で申し上げますと、まさにそのとおりです。漢もそうだというのは聞き及ぶところで

す。私は日本のローマ帝国研究者と大体知り合いでして、仲がいいところでは一橋の関係者ですけれど、東大で教えていた本村凌二さんがいまして、『教養としての世界史』という大変面白い本をお出しになっている。

その本村さんの帝国論というのもございまして、1つ特徴的なエピソードを出しています。

オクタウィアヌスがアウグストゥスになってから230年ぐらいたったところで、つまり西暦210年代ぐらになりますと、イタリア半島でないところの出身者、北アフリカ出身者が皇帝になります。セウエルスという人が皇帝になった。これはセム系の人でして、肌の色が黒いのです。それはオバマ大統領と全く同じ現象

だというのです。

1776年に建国したアメリカが、ほぼ230年たったところで、ホワイトでない人を大統領にしたのと全くこれは同じなのだという論を展開しまして、われわれはなるほどと思うわけです。全ての世界を飲み込み、そこから有為な人材を引き寄せ、いまのわれわれの感覚で言ったら、「君も優秀になれば、アメリカ人になれるよ」というわけです。

アメリカ同様、ローマ帝国はまさにそういう世界でした。ただ、リング・フランカとしてのラテン語なりギリシャ語はできなければいけないのですが、コトバができれば、帝国内のどこでもやっていけるそういう社会が、アメリカ帝国であれ、ビザンツ帝国であると申し上げることができると思っています。

国民国家というのは、そこがちょっと仕分けが違うかなというわけです。nationの同一性というのが、割とプライオリティーが高い要件として出てきますので、それによって一丸頑張るという集団性が顕著な特徴といえるでしょう。

その点、ビザンツ帝国は意外と開放的です。もちろん奴隷という存在はおりますけれども、割と解放奴隷にもなれました。例えばユスティニアヌスという皇帝などは、マケドニアの農民ですが、叔父さんが一旗揚げたくてコンスタティノーブルに行って皇帝になって、それを頼って若いときに帝都にのぼります。叔父さんのユスティヌスという人は字が読めないどころか書けないのです。ですから、皇帝の決済は全部御璽、御印つきですから、わたしはこれを読んだという、LEGIという署名をしていたらしいんですけど、

それは木杵で LEGI というのをくり抜いて、それをなぞっていたという逸話がありまして、これじゃいかんだろうということで、甥のユスティニアヌスには教養を身につけさせたといえます。文盲の者が皇帝にまでなれるというのは、開放性に富んで社会だったといえるでしょう。

他方、神聖ローマ帝国、962年から1806年と言われますけれども、ここは身分制社会ですので、極めて閉鎖的な家門集団が支配層を牛耳っておりました。これはありていに申し上げますと、田舎的な社会というわけです。身分制社会を形成させたのが、文明の周辺に勃興した国家形成途上の社会であったのかなと思います。

国民国家の国民というのは何ぞやというのは永遠の課題でございまして、難しいです。いま、まさにフランスなどはそれに苦しんでいますので、人口が7,000万ぐらいいるのですけど、そのうちの1割以上がフランス語の読み書きすら怪しいような人になったときには国家分裂になりますね。しかし自由を標榜し、ヒューマニズムに立って難民を受け入れなければいけないという国是ですから、第五共和政ですけれども、そこでのジレンマをどう解決するのかというのは、わたしなどが申し上げるところではないわけですが、難問です。国民とは何かというのは一生懸命問うているのではないかと思います。いうところの哲学者がいろいろ言ったところで、現実はどうとどめようもなく進行していますので、どうしたらいいのかという話です。しかもオランダはばかなことをしましたから、ばかと評価をしましたがけれども、持てる人からい

っぱい税金をとろうと思ひまして、有力な市民および企業が国外に逃げ出しました。再分配機能を発揮しようとしたら、フランス人をやめますという人が随分出た。企業も随分移転しました。なかなかジレンマであります。ある種、鷹揚な帝国主義のよい部分を引き継いでいるのがフランス共和国だと思っているのですけれども、難しいなと。

最後は全然関係ない話で恐縮でございました。

【司会】 それでは3番目の質問に移らせていただきます。貨幣とか信用の発展ということで、いくつかお聞きしたいと思います。ちょっと論争的、挑発的な質問を、それぞれ1つずつしたいと思います。

まず大月先生ですが、お話を聞いていると、明石先生が説明されたメソポタミアよりも1000年、2000年後のビザンツのほうが遅れているという、そんな印象を受けてしまうのです。それは本当なのだろうかと思ひました。

それから、1日1リットルのブドウ酒を修道院長が飲んでいたのでしょか？ 大月先生はおそらく大酒家でいらして、1リットルのワインなどどうってことないかもしれない。しかし、あれは他の物と交換するための商品貨幣としての役割を果たしたのではないのでしょうか。要するにわたしが言いたいことは、ビザンツ世界では大月先生のご報告から窺われるよりも、もっと分業が発展していて、互恵や再分配だけではなく、交換も結構盛んであったのではないかということです。

例えばわたしの専門の日本史の場合ですと、網野善彦さんなんかは、日本の中

世はけっして農業一辺倒じゃなかったと言っておられます。中世にはさまざまな職業が存在し、社会的分業がかなり発展していた。為替とか信用も発展していた。網野説は、ある意味で中世史を塗り替えたわけですね。そういうことも念頭にあって、ビザンツの通貨が基軸通貨であったのならば、もっといろんな為替や信用に関する記録が残ってもいいという気もしました。ビザンツでは、銀行業とか信用はどうなっていたのか、お聞きしたいと思いました。

つぎに、明石先生に対する質問です。明石先生が説明された金融市場は単一の市場と考えてよいのでしょうか。それはどういうことかという、わたしは、明石先生がお話された市場の他に、ローカルな金融市場もあったのではないかという気がしています。そういう地域的な金融・信用圏みたいなのもあって、重層的な形で金融市場が形成されていたのではないかと。きょうの明石先生のお話は、上層の部分だけを取り上げられたように感じます。

例えば、この国家を中心とした上層の貨幣信用経済と、ローカルな貨幣信用経済との組み合わせが経済発展に及ぼす影響は、中国について黒田明伸さんが強調しておられます。ということで、エジプトやギリシアのローカルな市場を明石先生はどう考えておられるのかお聞きしたいと思います。

【大月】 これは私からということで。ご指摘のとおり、わたし自身の研究の在り方にも規定されているのかもしれませんが、勉強してきた文献の在り方、つまり

はビザンツ学界というのが一応ございまして、その在り方に規定されているような気がいたします。ビザンツ帝国の中では史料の残存状況からして、商業交易の痕跡をたどることが極めて難しいのです。勢い残っているのが権利証書関係のもので、不動産関係の特に土地、下地です。上物ではありません。土地の権利関係を伝える証書が、かろうじてキリスト教会、修道院関係に残っているというだけなのです。ですから、経済史的な材料としての商業取引、小さな市場とか、都市間を結びつけるような多角的な、多面的な、多品種がどういうふう動いていたかというようなことをうかがわせるような史料がありません。

同じようなことは、もっと驚いていただくべきことなのですが、イスラム世界、ビザンツの後のオスマントルコにおいても、つまり交易的な商業取引の跡を追えるような資料はないといえます。ですから、わたしの学生たちでオスマントルコのことをやりたい者がいますと、全てはイタリアにいけます。大体ヴェネツィアとかフィレンツェにいくんですね。ともあれビザンツは、その後オスマントルコが蹂躪しましたので、そういった一切切の書きつけとかを焼いたとか破棄したということは大いに考えられるのです。いずれにしても実態をうかがわせる史料の一切がないという事実が、いまあるだけです。

ただ、オスマントルコはその後、もう100年前ですけれども共和国の革命で一応国体は変わったといえども残っているのです。史料があってもいいはずなのですが、トルコの経済はいますごい

ですから、オスマン帝国の話していいから、何か経済事情とか歴史を語ってくれる人を紹介してくれと言うと、いないというのですね。日本人に限らず研究者がいないのです。

これは史料状況に規定されて、研究者がいないのです。事態は国際的にも同じだそうです。結局わたしがやっているようなローカルなモスクとか、わたしの世界だと修道院とか教会の土地の所有関係、そこで成り立っているローカルな経済活動ですね。貧民救済はモスクでも行われていますので、そういうことを研究するかたちになるのです。

イスラムの場合はワクフというのですが、おそらく状況としては古代メソポタミアのように、ある意味広域的な、東地中海圏のギリシャ人社会を結ぶような交易というのは行われたと推定しています。それはポリス時代の民主政ギリシャの世界と同じだったと思います。その中心点として、いまやコンスタンティノポリスがあるというにすぎないと思います。

何がどう物品が取引されていたかというのは、そんなわけでわからないのですが、有名なところでは上エジプトからの金取引です。上エジプトから金を大量に持ってきています。これで金貨を作るのです。

あとはコーカサス、黒海の東側、あるいは黒海の北側のクリミアあたりの世界からも、金を持ってきています。ですから、ローマ世界は金貨世界ですから、その金の調達元としての周辺地域との取引が盛んに行われたことは記録に残っています。

ワインのことですが、首都の修道院長

に1日1リットル渡しているのは事実です。わたしは飲んでいたと申し上げましたが、当然実はそうでない可能性は想定しなければならず、それを市場に流して貨幣に換えていたと考えてよいかと思えます。ですから、小麦も1リットル以上って、そんなに食べるわけがないのですから、理論上は家族がいないのですから、いずれ市場がローカルにごさいます、そこで売り流していただろうと想定されます。

現物支給が大きかったのは国家的な管理の産物です。先ほどご紹介しました修道院長の給与は、ある種公務員ベースの給与体系になっていまして、現金が少ないのは、金を渡したくないという権力側のある種の思いが反映されていると解釈すべきです。金は権力側にとって対外的な決済手段として必要なのです。

きょうは全く申し上げませんでした、周辺にいろんな民族がいます。帝国の話に戻りますと、帝国というのは東アジアの帝国とローマだけではごさいません。ローマからしますと、すぐ東側にペルシャがあります。そこに追隨する周辺の有象無象の民族がおります。いまでいうところのアラブ人です。アラブ人も多様な支族名でいっぱい出てくるのです。

その連中がどっちにつくかは、くれる金次第です。それはいうところの年金ですが、せびるのですね。たかりをしまして、年金で黄金いくらという記述がいっぱい残っています。そのための、要するに手なずける決済手段として金は確実に必要ですので、ドメスティックな支払い手段としての金は極力抑える傾向がありました。

【明石】 先ほど浅井先生が、メソポタミアのほうも進んでいたのではないかなとかおっしゃっていましたが、もし皆さまがそういうように感じられたとしたら、ちょっと誤解を与えたかなと思うのです。

進んでいたか、いないかというのはまた違った評価で、わたしが申し上げたかったのは、貨幣経済を形作るような領域というのはしっかり古代メソポタミアでもあって、それがかなり大きなシェアを占めていたとかを申し上げているのではなくて、そういうところで活躍をした人たちは、ある意味では高度なこともどんどん行っていたらと申し上げたかったのです。ただ、その経済全体としてのインパクトとかそういうことでは、やはりまだまだ小さい部分であったのかもしれないとも思っています。

また、先ほど大月先生がおっしゃいましたけれど、メソポタミアの世界のベースは再分配なのです。現物給付というのは結構あって、その中で貨幣で支払える部分というのは徐々に増えてきたということも申し上げたいです。ただ、貨幣がなぜ使われるようになったかというのは、現物とは違った事情があったのだと考えています。そこで貨幣が使われるような、つまり資金循環と申しましたけれども、商人や企業者といった担い手がいないと、貨幣経済は広がっていかないですよということですし、古代において彼らが実際存在したということを言いたかったのです。

あとはローカルなマーケットのことなのですが、わたしが今日お話した内容は、ローカルな部分なんかに触れることがで

きないような、非常に限定的なものでした。1つの理由は、いま大月さんがおっしゃったような資料上の問題もあって、文献から窺える内容は、国家に関わるようなものとして出てくることが多いものですから、ローカルな世界は意外にわからないのですね。

ですからはっきり言うと、わからないから口にはできないというように、そう言うしかないということです。

【司会】 それではあと10分ぐらい時間がございますので、フロアのほうから2、3ご質問を受け付けて、最後にお二人にきょうのご報告の現代的な意義についてお話して頂き、締めくくりたいと思います。

どうぞご自由に質問をお出し下さい。

【質問者】 先生がたのきょうのお話、大変勉強になりました。ありがとうございます。

特に大月先生に伺いたいのですが、ビザンツ帝国がはぐくんだ再分配の仕組みの特徴が、その後オーソドックスに引き継いだロシアなどに、例えば文化的・制度的な片鱗として再分配的なものが、西ヨーロッパとは違う形で何か残っているケースというのは、何かあるのでしょうか。

【大月】 ロシア的なビザンツの遺産ということをおっしゃっておられるのですね。どうでしょうか。まさに慈善活動なんていうのが行われていますので、ただそれは西ヨーロッパでもそうです。西ヨーロッパとロシアの違いは、何になりました

ようか。社会経済システム上のそれですと、強力な中央集権の収奪機構と。どうなのでしょうかね。

あとはロシア人の特徴として、よくロシア研究者の先生から聞かされるのは、あの人たちは超人を求めるのだよと。尋常でないものを求めるので、スーパースターというよりもスーパーヒューマンを求めるといって、皇帝に過大な期待をするといいます。そういった民衆の、超人による救済意識をうまくつかまえた者が、政治的支配者になるのだというようなことを言われる方がいます。文学の研究者ですが、経済学部出身で、ロシア通の方なのですけどね。

それは西ヨーロッパとは違いますね。西ヨーロッパはみんな自由で平等で博愛だといいますね。みんなフラットでありたいのかよくわかりませんが、ロシア人はそうでないのです。超人を求める癖があるのがビザンツ的です。

【司会】 他にいかがでしょうか。どうぞ。

【質問者】 大月先生に1つお伺いしたいのですけれども。

その後の経済発展というのを見ると、ビザンツ帝国よりも西ヨーロッパに偏ったほうが、技術開発だとか経済発展だとかという点では勢いが強かったように思うのですけれども、このビザンツ帝国の再分配構造というのは、あるいはキリスト教を国教化したということが、その後のビザンツ帝国の技術的な発展を抑制するように働いたのかどうなのか、ちょっとご意見をお聞かせください。

【大月】 2つのことを申し上げたいと思います。ビザンツ的といいますか、地中海的といえましょうか、イスラムもそうですけれども、1つは富の余剰部分についてです。彼らはこれをおよそ消費してしまうのですね。そういう社会です。ですから、みんなでGDPを稼ぎ出して、500兆。われわれ国民が実利を上げているといたしますと、この500兆全部を祭りに使ってしまうような社会が「地中海的」でありまして、西ヨーロッパはその後、ここが宗教倫理と絡んでいるかなと思われるところなのですが、これを蓄積し、さらには資本化するのです。

ですから株式の分配金は抑えて内部留保して、資本化して投資に回すという企業構造につながるような精神回路が生まれるのです。これはいつ生まれるかというのが1つの問題です。いつ生まれるのですかね。例えば余剰を全面的に消費して、宵越しの金を持たない江戸っ子は、そんなようなわけで地中海人的であるわけです。それが、余剰を蓄積し、それを再投下して利潤を得る社会になるのはいつなのか。

それにまつわってもう一点申し上げたいのですが、これはヨーロッパでは14世紀から15世紀に顕われるとされますけれども、Industryという言葉の語義変化です。ある学校がcaptains of industryということのを校是にしている、industryはどういう意味だと解説するのです。Industryは企業だとお訳しになるのは、間違っていないのですが正しくもない。正解はちょっと違っていています。ラテン語でindustriaというのは勤勉という意味です。一生懸命働くということなのです。

これは西ヨーロッパの修道士的な生活規範の1つにもなっていないまして、ウェーバーが言うところの天職ではありませんけれども、Beruf もありまして、与えられたもの、職業、場所、そういったことを一生懸命やるということを概念にしているようです。

その *industria* というのが、西ヨーロッパにおいて至極真面目に受け止められたときに、やはり違う現象が起こるのではないかと思います。大胆な提案なのですけれども、それについての研究はたぶんございません。もちろん経済学からは出ておりませんし、言語学や文学の方からもたぶんありません。

あとは、もう1つは同じことかもしれませんが、先ほど申し上げましたように、ビザンツは帝国機構がきちっとあります。ビザンツ的、ローマ的呼び名はどちらでも結構なのですが、キリスト教ローマ帝国の系譜ということを1つ申し上げなければなりません。ビザンツが元祖で、その後神聖ローマ帝国がありまして、19世紀のドイツ帝国ですらキリスト教帝国だとわたしは申し上げますが、アメリカ帝国という場合すらキリスト教ローマ帝国だと申し上げたいわけですが、そういう意味ではキリスト教ローマ帝国という用語を今日も用いております。

ですからいくつか、ロシア帝国もキリスト教ローマ帝国なのです。そこにおいては理念がございまして、例えば天使がいるのです。世の中には神様がいて、最後にリヨンを見下ろす大天使ミカエルの図をお示しして言及しなかったわけですが、天使がいて、天使が神の意思を体现して、天上の世界よろしく、地上の

世界もガバナンスするのだそうです。administrate すると。

少なくともビザンツの国家機構は、天使の階層秩序に範をとっているのです。大天使、熾天使などの天使論は私にはできませんが、それを全部なぞっているのだと言われます。

天使の階層秩序に範をとった官僚制が西ヨーロッパにもしかれたかということ、そんなわけで西ヨーロッパは周辺民族ですから、受容の仕方がたぶん未熟なのです。ですから、違う発展経路に入った。

それが、先ほど最初に申し上げましたように、富の余剰を全体として資本化しないで使ってしまう、貧民救済に使うという社会経済制度と結び付きます。ビザンツでは祭りが80日ぐらいあります。ほぼ毎日お祭りをやっています、コンスタンチノーブルで。半休日も30日ほどあります。年間3分の1ぐらいが祝祭日です。そこで皇帝がロイヤルボックスで、みんなにパンを配っていますので、たぶんワインも配っているのですけれども。暴動が起こるといこともあったのですが、起こらないようにパンやアメを配っているわけです。

西ヨーロッパではそういうことはないと思います。*industria*、聖貧の世界です。以上でございます。

【司会】 ありがとうございます。それでは時間になりましたので、最後にお二人からそれぞれきょうの報告の現代的な *implication* をお話いただけますか。

【大月】 お先に、では。

冒頭でも申し上げましたように、私は、

なぜビザンツをやっているのかとご質問を受けるときには、やっぱり現代経済を知りたいがために回り道をしている、とお答えしています。

ですので、第一の課題はやはり現代の、今のわれわれが立っている社会の舞台装置について理解を深めたいということです。回り道をして、ヨーロッパの古いところを勉強すべきだという先生がたのご指導に従ってそうしたのですが、さらにその先生がたはキリスト教世界全体を舞台にして事態は進行したのであって、いま申し上げましたとおり、西ヨーロッパは少し異常な道に入ったのだと見立てられました。ですから、その全体のプラットフォーム、キリスト教世界を見渡さないと、西ヨーロッパの特殊性、特殊西ヨーロッパ的なことはわからないということを説かれた。それを実践されている先生がおられたものですから、私もそういう道に入ったということです。

わたしの考えではというか、わたしたちの考えでは、キリスト教、ローマ帝国が出来上がったところで、今日に至るような枝がそこに全て含まれていた、そういう幹であろうというように考えております。EU推進派の人たちも、ヨーロッパは1600年の歴史と言います。

ですから皆さまにおかれても、ヨーロッパは1600年の歴史だと単に鵜呑みをなさることなく、この人たちは何を言っているのか少しお考えいただければと思います。その幹のところにはビザンツがあったということです。

【明石】 きょうの話の最後のところで、なぜイスラム世界と西欧の世界との間に

差がついたかというのは、これはいろいろな人が研究といいますか、興味を持たれているところです。私自身金融の世界というのはある意味で、常にいろんなものをアイデアをつくり出す、イノベティブな世界なのではないかなということを感じているわけです。ですから、それは古代から既に始まっている。ところがイスラムが先行して、金融の世界でもかなり大きなアイデアを具体化して、一定のレベルまでいったのに、それをいわば真似るような形で西欧の世界は全部取り入れて、特に北イタリアのマーチャント・バンカーというのはいろいろなアイデアをつくり出して、それ以上のことをやり始めて、最終的には近代につながるようなことまでやっていくわけです。

ですから、先ほどルーツはどの辺にあるかと言いましたけれども、わたしは北イタリアの商人たちというのは、非常にそういう意味で資本主義世界をつくり出すのに大きな役割を果たし、イノベティブな役割を果たしていったのではないかと。そういう意味で、マックス・ウェーバーの（プロテスタンティズムの倫理という）考え方よりは、もうちょっとそちら（北イタリア商人の役割）のほうを考えてみるべきじゃないかと思っています。彼らが行ってきたイノベティブな工夫は、徴利の禁止というキリスト教上の制約がある中で、それをくぐりながら、最終的には徴利を認めるような形に変えていくわけです。

それは、なぜそうなったのか。逆に言うところイスラム世界では、イスラム教の教えがある意味枷になって、それを超えるというのがなかなかできない、やっては

いけないという大枠があるので、それ以上の工夫がありえなかったと考えていいのかと思うのです。

その違いが何なのかというのは、いろいろあるのですが、やはり西欧社会のほうがより競争的で、いろんなものを破壊することを躊躇しないような意味では暴力的であったところにあるのではないかと。それは、軍事面でもそうですね。ところがイスラム世界でも、あとはインドでも中国でも、巨大帝国がつかられてもあるところで1つの状態にとどまり、平和な状況をつくり上げていくのです。対して西欧の世界というのは逆です。競争しながら常に破壊し、軍事力の技術も高めていって、最終的には世界を植民地化するという形になります。何かそういうところでも本質的な違いがどうも、中世の十字軍派遣から始まったのではないかなという気がいたします。そういう意味で、つながりがあるのかなと。

【大月】 いまご指摘があったような十字軍以降とかヴェネツィアというのは、ターニングポイントとなった重要なファクターだとわたしも思います。もっと一般的な言葉でいいますと、破壊的というのは陸上の領土争いなどのことなのですが、ヴェネツィアがやったのは海を支配したことでした。このことは重要で、その後、ご承知のようにイギリスが海を

支配して、これが世界のルールづくりの要みたいなことになっているというのは、歴然たる事実です。

ヴェネツィアが一時それを始めた。つまり、海を支配し、ルール作りの要となった。その後、ポルトガル、スペイン、イギリスがその役割を担うようになりますけれども、ヴェネツィアの商人が海を支配したということはいろいろな意味で画期的だったと思います。今日ご紹介があったような決済手段とか、ウストラは利息をとっちゃいけないのですけれども、為替でもって利ざやを抜くようなことをやるのです。これは一体何なのだと。これは帳簿が残っていますので、実態を明らかにできるのですが、歴史プロパーの人間がやるにはなかなかしんどいところなのですね。

今日は明石先生がわかりやすいお話をなさってくださいだったので、わたしもなるほどと思って勉強させていただいたところでは。ヴェネツィアがそうなったのはいつか、なぜかという話でございましたが、たぶん十字軍が影響を与えてのだと思います。

【司会】 それでは時間になりましたので、この辺で終わらせて頂きたいと思います。明石先生、大月先生、本日はどうもありがとうございました。